



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3189 号 2016.8.16 発行

化粧療法（上）いくつになってもキレイは元気のもと 産経新聞 2016年8月13日
 メークアップでイキイキとした表情になった100歳の日下ミエ子さん（野村佐紀子撮影）



「化粧療法」が認知症予防などの面から注目されてきた。オシャレや身だしなみだけではない。化粧をすることで脳が活性化され、抑鬱、健康寿命の延伸、介護費用の削減まで期待できるという。クレオパトラのアイラインにみられるように、古代から厄を除け身を守るためにも施されてきた化粧。その不思議なパワーを今こそ。さあ、おばあちゃんたちをメークアップ！



「昔、ここに眉毛描いてたでしょ」。まばらな白い毛にグレーの眉墨が書き足される。「もう、いーわよお」「すぐに終わりますからね…。昼下がりの介護老人保健施設「つくしの里」（川崎市）。メークを施されている入所者の田川好子さん（100）は、照れと不機嫌さの入り交じる態度を示していた。

「はい、できました！」。車椅子が大鏡の前に運ばれると、重たそうなまぶたがパッと開いた。「わ！ きれいになっちゃった」。はっきりと喜びを口にする。



鏡の中に、凛と風格の漂う、激動の1世紀を生き抜いた女の顔があった。昔の記憶



もよみがえる。「子供を抱いて、防空壕（ごう）を探して逃げ回ったわ。戦争はダメよ」。川崎大空襲の話も飛び出した。

「その子が私。明治の男に嫁ぎ、自分の装いなんて後回しだった母が、お化粧でこんなにいきいきするなんて」。長女の櫻田泰子さん（72）が目を見張った。

メークアップ担当の岩田ちえ子さん（59）は、「化粧には女性としての意識を呼び起こし、エロス＝生命力を湧かせる力があると実感している。変身や若返りではなく、この顔で生きてきたというお年寄りの誇りを引き出したい」。

平成23年にスタートし、200人以上の高齢者に向き合ってきた「プラチナポートレート」プロジェクト。メーク後、介護士経験のあるパタンナーの久村美幸さん（54）が制作した着脱容易な服や小物でドレスアップ。その晴れ姿を写真家の野村佐紀子さん（49）

がカメラに収める。

野村さんは、世界的な写真家・荒木経惟さん（76）の唯一の弟子。岩田さんは、荒木さんの撮影時のメイクや着付けを長年担ってきたスタイリストだ。

無償の手弁当だが3人は、「ボランティアじゃなくて押しかけ。それぐらいお年寄りが魅力的」。つくしの里の作業療法士、遠藤さやかさん（33）は「入所者にとって特別な時間です。認知症の方がノリノリになったり、元気におしゃべりする姿を見るのはうれしい。何よりご家族に喜ばれている」。

日下ミエ子さん（100）のメイクに立ち会った長男夫婦と娘は「お母さん、これも着けて」。自分たちが贈ったアクセサリーを持参していた。メイクをして鏡を見せるとこれまた、乙女が恥じらうようなかわいらしい表情を見せた。

野村さんの師匠の荒木さんは4年前、本紙「朝の詩」が生んだ“100歳の詩人”、柴田トヨさんの自宅を訪ねて撮影している。「きちんと化粧をして、待っていてくれた」と荒木さん。みずみずしい詩作のベースには、口紅を引く美意識の高さがあった。「化粧療法とか言っちゃうと、何か違う気がする」と荒木さんは前置きしつつ、こうアドバイスする。

「化粧するととととと女のエネルギーが出てくるんだよ。薬飲むよりいいだろうね。年とったら余計にやった方がいい。化粧って化けるって書くけど実は逆なのさ。心を開いて、その人の素を引き出す力があるんだよ」

資生堂で「化粧療法」研究に携わる医学博士で介護福祉士、池山和幸さん（40）

「化粧療法の特徴は、一瞬で明らかな効果が目視で確認できること。化粧をした顔を鏡に写したとき、眠たそうだったまぶたがパッと開く。それは自分に対する興味がわいている状態。口角も上がっていますね。

人間は年をとると自分や他人への関心を失い、閉じ籠もりがちになるが、化粧によって人間らしさを取り戻すことができる。環境を整えてあげれば、人はいくつになってもメイクできます。視力の衰えは拡大鏡でカバーして。口紅を付けるだけでも違います。

資生堂では平成25年、高齢者施設向けに化粧療法を事業化し、26年度には経済産業省の「健康寿命延伸産業創出推進事業」として効果を検証。お年寄りが自分で化粧することで脳が活性化し、抑鬱、筋力アップ、自立度向上が確認された。1人当たり年間1万4220円の介護費用が削減できるとの試算も出ています」

化粧療法（下）外見だけでなく「心の化粧」

セージュ山の手で行われている化粧療法。話にも花が咲く＝札幌市西区（杉浦美香撮影）



化粧療法は精神科の患者や介護現場でも効果を上げている。

メンタルヘルスや依存症の治療を行う医療法人耕仁会札幌太田病院（札幌市西区）では、治療の一つとして平成15年から化粧療法を取り入れた。

午前9時45分、音楽が流れる院内の一室に次々と患者が顔を出した。

「今日はどこまでしていいかしら。（椅子の後ろに寄りかかってください）」

インストラクターの小野和代さんが優しく声をかける。

「華やかな気持ちになります」

化粧を施してもらった女性患者は笑顔を見せた。

入室時にはいらついて周囲をにらみつけていた男性も首や肩のマッサージを受け、眉を



整えてもらううちに表情が柔らかくなり、笑い声を立てていた。



化粧療法は精神を落ち着かせることに役立つ。この日は退院を間近に控え、

日常生活を送る“心の準備運動”として参加している女性患者もいた。

太田健介院長は「化粧療法は認知行動療法の一つ。患者は身だしなみに無関心になりがちだが、化粧で現実と対面し、鏡を見ることで自分に興味を持ったり、自信を持ち自己を肯定することにもつながる」とその効果を説く。療法は外見だけではなく「心の化粧」にもなっているという。

同法人が経営する介護老人保健施設セージュ山の手の高齢者デイケアも1月に2回、化粧療法を行っている。

約2年にわたって療法を受けている西川澄子さん（90）は「アイシャドウをつけるなんて昔は考えられなかったけれど、気分が上がります」と鏡をのぞきこんだ。

優しい色のルージュをつけてもらった星野ウメさん（94）は「娘のお婿さんが療法を受けるときれいですね、と言ってくれる。それがうれしい」と語る。

「人がきれいになるのを見るだけでも楽しくなる」というのは大黒百合子さん（77）。化粧談義に花が咲いた。

日本化粧療法協会の原崎美也子会長は「鬱や認知症が進んでいる方も化粧療法で次第に心を開き、最初は嫌がっていても肌を触らせてくれるようになったり、表情が豊かになったりする。社会復帰のスムーズな導入にも役立つ。一回のイベントに終わらずに継続していくことが大切だ」と話している。

編集後記

日本化粧療法協会会長の原崎美也子氏が化粧療法に取り組むようになったのは、「敬老の日」にボランティアとして高齢者を施術したのがきっかけです。札幌太田病院の当時の院長がその効果を認め、療法として継続的に取り入れ、すでに10年以上がたちます。化粧療法が一助となり患者から店で働く“看板娘”になった人も。

取材で訪れたとき、怒っていた精神科の入院患者が療法後、鏡を見て花のような笑顔が浮かべたのは感動的でした。精神的にいっぱいになると、身だしなみもおろそかになりません。

化粧と言うとフルメイクや外見のためだけのようには思っていましたが心の余裕を意味します。男女を問わず、年を重ねても自分を肯定するきっかけになることに気付かされました。

化粧療法の効果

リラクゼーション



積極性



社会性



気分の高揚



※平成21年5月から1年間、月2回、札幌太田病院デイケアで実施した11～83歳の104人(男15人、女89人)にアンケート

た。(杉)

化粧療法

フェイシャルケアやメーキャップなどを通して自信や満足感、自己肯定感などを感じてもらう取り組み。医療施設や老人保健施設などで精神疾患や認知症の患者の心理・行動療法の一つとして取り入れられている。

化粧行為や色彩が回想のきっかけとなったり、自身の姿を鏡で見つめることにより自尊心や自己愛が回復したり、感情や表情が蘇ることが認められている。

社説：相模原の事件 予断もたず徹底検証を 朝日新聞 2016年8月16日

相模原市の障害者施設で先月おきた事件を受け、その検証と再発防止を話しあう厚生労働省の有識者会議が始まった。秋ごろまでに提言をまとめる。

施設で3年以上働いた容疑者の元職員がなぜ、多数を殺傷するに至ったのか。その供述や経緯は断片的に伝えられるが、全容の解明には時間がかかる。

きわめて重大な事件である。個人の犯罪としてのみならず、社会全体で教訓をくむべき事態ととらえるのは当然だ。有識者会議は厚労省という枠組みにとらわれず、幅広い観点から問題を掘り下げてほしい。

容疑者にかかわった行政、警察、医療の各分野の対応を見すえ、課題と連携の改善を考える必要がある。それには、事実にもとづく多角的な検証を進める姿勢が欠かせない。

ところが、これまでの議論の方向が、医療に絞られがちであるように見えるのは心配だ。

容疑者は2月に犯行を予告する文書を衆院議長公邸に届け、その後、行政による強制入院の措置を受けた。そのため退院の判断や退院後の対応が重要な論点の一つであるのは確かだ。

だとしても、そうした問題は単に病院と医師らの対応だけで解決できるものではない。治療の長期継続やその後の生活支援には、行政や福祉サービス、地域社会などを含む、複合的な態勢づくりが必要だ。

容疑者は、退院後は東京の親元に行くはずだったが、実際は相模原に戻って、独り暮らしで一時、生活保護を受けていた。そうした情報は役所内で共有されていなかった。

措置入院の際に大麻の使用も確認されていたが、警察にその情報は伝わっていなかった。

入院以降の医療と行政・警察との情報交換、退院後のフォローはどうあるべきだったか。医療任せでは議論は尽くせない。

障害者施設の防犯体制も検討課題になるが、地域からの隔絶を強めるばかりでは、障害者と共生する社会の意識が阻まれ、逆効果になりかねない。

「地域に開かれた施設」「入院医療中心から地域生活中心へ」という今の精神医療の流れに逆行しないような配慮が求められる。

障害者団体などからは「精神障害者は危険な存在だ、という偏見、差別を助長しかねない」との懸念も出ている。

容疑者はきのう殺人容疑で再逮捕された。捜査はこれからもまだ続く。事件の性質を予断で結論づけることなく、慎重に冷静に、同様の事件を防ぐための有効な道筋を探りたい。

相模原殺傷 来月にも施設の方向性結論 県、家族らの意見踏まえ

産経新聞 2016年8月16日

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺された事件で、県警津久井署捜査本部は15日、殺人の疑いで元職員、植松聖(さとし)容疑者(26)を再逮捕した。事件の全容解明に向けた捜査が続く中で、県は同日、事件の原因究明や再発防止策を話し合う対策本部の第3回会議を開き、9月中旬までに施設を建て替えるか大規模改修するかを決めることを確認した。その後、入居者家族や施設側の意見を聴き、最終的な

結論を出す。

黒岩祐治知事は会議の冒頭で、「再生を目指す方向性を見せたい」として、対策本部の名称を「津久井やまゆり園事件再発防止対策・再生本部」に変え、再生への思いを強くにじませた。入居者の生活改善や職員の精神的ケアなどの対応なども加速させるよう指示した。

県によると、15日午前9時時点で75人が在園し、そのうち22人が体育館での生活を続けている。そのほか32人が他施設に移動、20人が自宅に帰宅、10人が入院している。

一方、県内の特別支援学校51校の校長が参加する県特別支援学校長会は同日、事件を受けて声明文を発表した。声明文では「障害のあるなしで人を区別する前に、人は障害者である前に一人の人間であり一つの人格である、ということを深く心に刻むべきだ」「障害者が暮らしやすい社会をつくるのが、あるべき姿」などと訴えている。

記者の目 相模原殺傷事件＝須藤孝（政治部）

毎日新聞 2016年8月2日

事件のあった相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」＝7月26日、本社ヘリから



憎悪犯罪、全力で闘おう

19人が殺害された相模原市の事件は障害者を狙った典型的な「憎悪犯罪」（ヘイトクライム）だ。特異な人間が起こした突発的な事件にとらえるべきではない。憎悪犯罪には必ずそれを容認する社会の闇が背景にある。「障害者は生きていても意味がない」という主張と闘う姿勢を明確に示さなければならない。

一般的に「憎悪犯罪かどうか」については慎重な判断が必要だ。動機はさまざまであり、複雑に絡み合っていることも多い。しかし、今回の事件について言えば、実行を予告した手紙の内容など事前の主張、実行方法、実行後の供述などが障害者を標的にする点で一貫しており、憎悪犯罪と言わざるを得ない。

社会の病巣映す 価値観への挑戦

憎悪犯罪は欧米では量刑が加重される場合も多い。それは、憎悪犯罪が殺人や放火などの犯罪行為であることに加え、社会全体の価値観に挑戦する側面を持っているためだ。民主主義社会とは基本的人権を根幹におく社会であり、そのことに対する攻撃は許されないと考えられているからだ。ナチズムが否定されるべきなのは、ユダヤ人や障害者を組織的に殺害した例をあげるまでもなく、特定の社会集団を攻撃すること自体を目的としていたためだ。

今回の事件の容疑者が、特定の主張に影響されて今回のような考えを抱くようになったかはまだわからず、今後の調べを待つ必要がある。しかし、「障害者は生きていても意味がない」という考えは、「火星人が攻めてきた」というような妄想とは異なる。現在の社会のあり方のなかに、そうした考えを容認するものが水面下で拡大していないか、省みて自らの社会を厳しく点検する必要がある。

「そんなことを考える人などいるはずがない。やったのは『異常者』だ」という言い方は危ういと思う。自らと無縁と思うほど、危険への備えを怠る結果になる。憎悪犯罪にどう対応するかという社会の経験の積み重ねがある欧米と異なり、日本社会ではまだ十分に、こうした時どう闘うべきかという対応が固まっているとはいえない。

6月に米国のフロリダであった同性愛者の集まるナイトクラブでの銃乱射事件ではオバマ大統領が憎悪犯罪と非難したうえで、「米国民への攻撃はその対象が誰であれ、われわれ全員への攻撃だ」と述べて性的少数者への連帯を表明した。

これは何もオバマ大統領個人の特定の価値観に基づく判断ではなく、誰が大統領であってもこうした事件には厳しく対応しなければ民主主義社会が成り立たなくなるという危機

感からの発言だ。

オバマ大統領の言葉を踏まえるならば、「障害者は生きていても意味がない」と主張して障害者を狙って刺殺した今回の事件は、日本社会全体への攻撃だととらえるべきだ。「よくわからない」と沈黙してはならないと思う。憎悪犯罪に対しては可能な限り敏感になり、全力で対抗しなければならない。

誤った主張に対抗する力磨け

たしかに、「障害者は生きていても意味がない」と公の場で口にする人はいない。匿名のネットであったとしても、ごく少数の主張だろう。しかし、広島、長崎の被爆2世に対する結婚差別や、東京電力福島第1原発事故の被害をめぐる言説のなかに、そうした意識が深くよどんだ形で隠されている場合はないと本当に言えるだろうか。昨年11月には、茨城県の教育委員が「(障害児の出産を)減らしていける方向になったらいい」と発言し、批判を受けて撤回した。

自分は「障害者差別などしない」あるいは「障害者差別に反対する」と言うことはたやすい。しかし、自らが生きる日本社会のなかにそうした闇が潜んでいないと言い切れるか。今回の事件で被害者となった障害者はなぜ地域社会のなかではなく、施設に集まって住んでいたのか。そこで働いていた容疑者が「障害者は生きていても意味がない」と考えたとすれば、我々の社会は障害者を本当に受け入れているといえるのか。

必要なのは今回の事件の容疑者を「異常者」ととらえ、社会から排除して忘れ去ることではない。容疑者の主張をしっかりと否定する強さと敏感さを身につけなければならない。それは日々、意識的に考え、発言し、表明していかなければ鈍麻していくものだ。

日本には1996年まで優生保護法という、優生思想に基づいた名前の法律があったことを忘れてはならない。「障害者は生きていても意味がない」という主張が、そうした闇に忍び込んでこないとは断言できないはずだ。

<相模原殺傷>容疑者「自分は死刑にはならない」発言も 毎日新聞 2016年8月15日 植松聖容疑者＝竹内紀臣撮影



◇逮捕から一貫、障害者への殺傷行為の「正当性」主張

19人が死亡した相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件で、捜査関係者によると、元同園職員、植松聖（さとし）容疑者（26）は7月26日に逮捕されてから一貫して、障害者への殺傷行為の「正当性」を主張しているという。取り調べには騒ぐことなく素直に応じているが、集中力が途切れやすい一面があり、話すことに飽きると黙り込むこともあるという。

「今の日本の法律では、人を殺したら刑罰を受けなければならないのは分かっている」。植松容疑者はこれまでの調べでそう供述する一方、事件への反省の言葉はなく、「権力者に守られているので、自分は死刑にはならない」という趣旨の発言もしているという。

事件に至った背景については、障害を持つ中学時代の同級生とのかかわりや、学生時代の障害者支援ボランティア活動などを通じ、「障害者は不幸をつくる人たちだと思うようになった」などと供述しているという。

2012年から津久井やまゆり園に勤務し、今年2月には同園職員に障害者への差別的な発言をするようになった。県警の取り調べでも同様の供述を繰り返しているといい、捜査幹部は「障害者への偏見が下地としてあるようだが、それが大量殺人という形に飛躍したのはなぜか、解明が必要だ」と話す。【村上尊一】

中学校侵入 盗み食い給食を肴にビール 支援学校教諭を懲戒処分 神戸

産経新聞 2016年8月15日

以前勤務していた中学校に忍び込み、生徒の給食を食べたとして、神戸市教育委員会は15日、市立友生（ゆうせい）支援学校の男性教諭（54）を停職3カ月の懲戒処分にした。給食は前日に欠席した生徒の分で、廃棄予定だった。教諭は市の調査に「廃棄はもったいないと思った。これまでに4、5回侵入して給食を食べた」と話したという。

市教委によると、教諭は今年2月27日午前8時半ごろ、以前勤務していた同市兵庫区の夜間中学校に侵入。職員室で、持ち込んだ500ミリリットルのビール缶2本を飲みながら、ビビンバなど2人分の給食を食べた。

この日は土曜日で、同日午前9時ごろ、残務処理のため登校した教頭が教諭を発見。「教材を探している」と偽ったが、机の上には弁当とビールがあり、盗み食いを認めたという。

教諭は平成16～24年度に同校に勤務。鍵の管理を任せられ、無断で合鍵を作っていたといい、これを使って、校内に侵入していた。

兵庫県警兵庫署は6月28日、建造物侵入と窃盗容疑で教諭を逮捕。その後釈放して在宅で捜査を続け、今月5日、両容疑で書類送検した。

熊谷の特養ホームで手続きなく身体拘束 不適切な医療行為も

産経新聞 2016年8月16日

熊谷市野原の特別養護老人ホーム「虹の郷」で、認知症の入居者5人に対し、国が定めた手続きを取らずにベッドを柵で囲うなどの身体拘束を行っていたことが15日、県や同施設への取材で分かった。同施設では不適切な薬の管理や介護職員による医療行為が常態化していたことも判明。県は適切な管理を指導するとともに介護報酬の自主的な減額を求める方針。

県福祉監査課などによると、平成26年5月ごろ以降、8人の介護職員が入居者約45人のうち79～103歳の男女5人について家族らの同意を得ないまま、夜間にベッドの周囲を柵で囲うなどした。一部の入居者には特養ホーム「愛心園」（同市）で不適切な身体拘束が発覚した27年11月以降も継続していた。

同課は情報提供に基づき7月に特別調査を実施。同課は入居者が過去にベッドから落下するなどしていたため、事故発生の恐れがあるとして拘束の必要性を認めており、虐待には当たらないとしている。

一方、調査では摘便という便を取り出す医療行為を介護職員が行っていたことや入居者が処方された認知症薬や胃腸薬、精神安定剤などを投与せずに放置していたことが判明。ずさんな管理体制が浮き彫りとなった。

同施設では、不適切拘束を黙認していた職員を含め介護職員9人と施設長を文書注意の訓告処分としたほか、摘便を指示するなどした看護師を戒告の懲戒処分にした。看護師は7月に依願退職している。

【オフィスあるある！】猛暑の中で室温バトルも真っ最中！ OLの7割が「エアコン温度こっそり変えてる」 外回りの営業マンは…

産経新聞 2016年8月16日

夏場には欠かせないエアコン。その設定温度をめぐり、オフィスで静かな“戦い”が繰り広げられている。上げては下げられ、下げては上げられる…。「あっ、いつのまにか元に戻されている！？」。異例の猛暑に見舞われているこの夏、心の中でそんな悲鳴を上げている人も多いのではないだろうか。（玉崎栄次）

内勤だと「寒い」 外回りから戻ると「暑い」

「『寒いなあ』と思って確かめると、いつ間にか引き下げられているんですよ。冷え性なので困ってしまいます」

メーカーのオフィス事務をする女性（33）＝東京都杉並区＝は苦笑する。この職場

のエアコンの設定温度は28度と決められているのに、26度まで下げられていることがよくあるという。

「犯人探しをするわけではないけれど、『いったい誰よ!』っていらっとしちゃいますよね」

一方、別のメーカーで営業を担当する男性＝大阪府吹田市＝は「35度超えの中で外回りから汗だくになって職場に戻ったとき。オフィスが冷えていなかったら、がっくりきちゃう。汗が引くまで一時的にと考えて、設定温度を下げますね」。しかし、仕事に追われ、温度を戻すことを忘れることも少なくないという。

水面下で設定温度の変更合戦!

ビル管理大手の三菱電機ビルテクノサービス(東京都荒川区)は今年6月、オフィス勤務の20～60代の男女1000人を対象に、職場のエアコンについて調査を実施した。

職場のエアコンの温度変更が可能なオフィスで働くのは605人だった。そのうち62・1%(376人)がエアコンの設定温度を「こっそり変更したことがある」と回答。男女別に見ると、男性が54・6%であるのに対し、女性は70・3%に上った。

さらに、376人のうち73・7%(277人)は、変更した温度が「元の温度に戻されていた経験がある」。その277人のうち78・0%(216人)は「再度、温度を変更し直した」という。これも男女別にみると、男性が76・8%だったのに対して、女性の割合が高く、78・9%に上っていた。

温度を変更したにもかかわらず元に戻された人の大半は、再び温度の変更にも挑戦している。「設定温度の変更合戦がオフィス内で繰り返されているようだ」と同社の担当者は話す。

「寒がりのベテラン社員に逆らえない」

温度の上げ下げについて、27・4%の人は「設定温度の希望を言い出せない」としている。

同社がその理由を尋ねたところ、さまざまな回答が寄せられた。

「寒がりのベテラン女性社員には逆らえない」(50代女性)

「電気代のことを言われるので、言い出しにくい」(40代女性)

「自分勝手と思われたくない」(30代男性)

エアコンの設定は、職場のコミュニケーション問題とも直結するようだ。

同社の担当者は「男女や年齢などの違いで、温度感覚は異なるものなので、完全に解決するのは難しい」と指摘している。

温度をめぐるとの オフィスのエアコンの 実態調査	Q1 変更した温度が元の温度に戻されていた経験があるか?		
	男性	女性	全体
ある	72.7%	74.5%	73.7%
ない	15.1%	13.7%	14.4%
わからない	12.2%	11.8%	12.0%
	Q2 再度希望温度に設定を変更し直したことがあるか? (Q1で「ある」と回答した人へのみ質問)		
	男性	女性	全体
ある	76.8%	78.9%	78.0%
ない	23.2%	21.1%	22.0%

※三菱電機ビルテクノサービス調べ

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんペクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行